



理事会だより (9・12)

一、小田原秋季俳句大会①選句取りまとめ中、大会には市長は公務のため安藤副市長出席(事業部)②大会当日の役割分担を決定。寿齢者表彰対象者の確認、記念品手配は須田聡子さん。(総務部)

二、第61回梅まつり俳句大会(七年二月九日)の①兼題、要項を決定(詳細は本号十頁)。②選者特選賞は佃名誉会長、池田顧問、村場会長、草むら・こよろぎ・沈丁の各グループ代表。③季語「梅」は「春に限る」。(事業部)

三、秋の吟行会(十一月一日)のコース紹介マップを配布し説明。(事業部)

四、合同句集原稿は締切の本日に出揃った旨報告。(山田委員長)

五、けやきロッカーを整理し一部をUMECORロッカーに移した。(総務部)

理事会日程

11/14、12/12、1/9

(毎月第2木曜日 けやき15時より)

「俳句おだわら」10句抄(685号より)

小澤純子 抄出

継ぎ色紙万葉仮名の涼しかり
葬送の鐘はこびくる青田風
潮の香も一緒にたたむ日傘かな
梅雨に入る墨絵のような箱根山
六根を乱して今日の油照り
梅雨明けの三坪の菜園彫らみぬ
函嶺の雲脱ぐ吾れは更衣う
職退きて帰るふるさと柚子の花
砂丘ゆくジープの轍雲の峰
琴ほどの石橋わたり苔の花

瀬戸正洋 抄出

継ぎ色紙万葉仮名の涼しかり
「罪と罰」紙魚縦横に走りたる
あげ花火青い時間が迫りくる
入梅が四肢の不調を連れて来る
浜木綿の花や破屋に風荒ぶ
天から枇杷が落ちる鯉が浮いてくる
藻の花に乗って漂流八月へ
汗の子や父のスキンシップが裏目
偏屈屋の影も偏屈日の盛り
蟻踏みそう待ち人はまだ来ないから

近藤 久江
神山つとむ
伊藤はる子
豊田 幸枝
中村 昌男
田中 幸子
西賀 久實
高橋久美子
齊藤 桂
山田 照子
近藤 久江
瀬戸 悠
寶子山京子
加藤かほる
村場 十五
大石 雄介
大石 和子
岡田 典代
小澤 園子
田畑ヒロ子

秋深む 青木たけを

娘や孫は皆帰りぬ秋桜

あしがらに二百十日の風優し

背を向けし友を思えば萩乱れ

富士箱根丹沢大山霧の中

原爆忌艱難辛苦という言葉

折りにふれ涙もろきや秋深む

柿の秋この地に生きて三十年

頂上はまだまだ遠し秋澄めり

天高し屈伸の手は地に着かず

青柿の二・三ころがる今朝の庭

新涼や炊立て飯におとす黄身

七曜の過ぎゆく速さ衣被

窓あけて虫の声聴く雨上り

早稲の香や峡はゆつたり時重ね

露草を踏みて細道ゆづり合ふ

書店なき終の住処や秋灯し

俳句おだわら(9・19)メ切り、到着順)

◆小田原鹿火屋(8・23)

風は秋庭木に戻る雀五羽

乾杯のグラスの響き秋立ちぬ

激動の語り部となり終戦日

金の鯉子等に寄り来る風は秋

一墨より生るるにじみや涼新た

◆香雨・梅ごち(8・25)

開け閉てに軋むシャッター秋暑し

残り火を吹けばあかあか魂送り

芋殻火を囲み思ひ出語り合ふ

新涼やゆつくり回る風見鶏

夕されば家族そろひて門火焚く

鳴き声のやめば気になり秋の蝉

門火焚く母せしやうに背を丸め

袖口に残る暑さを捲りけり

百箇ひゃつかにち日知らで咲きつく百日程

◆こよろぎ(9・12)

宵闇や猫の目ひかる漁夫の納屋

久江報

足立 和子

川本 育子

高橋 小糸

山崎 悦子

近藤 久江

忠山報

肥後ちさこ

関戸わよこ

青山 典子

門松 鳳文

吉田 百代

吉田 康雄

陌間みどり

小澤 純子

池田 忠山

つとむ報

高杉掘三朗

衣被 一ノ瀬茂代

最高地点 菅野英余

衣被いつまで続く馬鹿話
 早稲の飯小さき箸持つ左さき
 JR最高地点トウキビは生で
 皆が皆良い日ですねと青蜜柑
 色香るワイン祭のグラスグラス
 ゆうこ流メはカレーの芋煮会
 次男には次男の役がとろろ汁
 走り蕎麦切り手は若き吉田君

天狗風 大島美恵子

寄せ貝のかたちいろいろ天高し
 天狗風鳴子ならせてそれつきり
 放心の下午やかかけすのからさわぎ
 立冬や鴉群れたるもやひ山
 筐底に黄ばむ新聞小春空
 真鍮のカフスポタンや三島の忌
 笹子鳴きをり夕空の鬱金色
 夕空のグラデーションや焼芋屋

竜胆の花咲く丘の吾妻茶屋 板谷 雅泉

大花野四囲どこまでも晴れわたり 植松テル子

端溪の墨に宵闇にほひけり 神山つとむ

◆山北(8・22) 由里子報

ネックレスはずして汗の落着きぬ 和田恵美子

盆用意あれ・これ好きと店の前 尾崎 幸子

ひぐらしやアルバム整理半ばなる 星 一義

惣菜の半額シール秋の蟬 石田加津子

台風接近ゴキと音たて冷蔵庫 竹下由里子

◆沈丁(9・5) 寶子山報

新カフェにじぐざくの列鰯雲 若村 京子

亡き父母の住む星遠し鰯雲 柳澤ミサ子

鰯雲天守真下に動きけり 田中 恵一

ちやぶ台に十五夜の節昭和かな 河本 純子

一日を無事に終りし鰯雲 勝木 澄子

鰯雲風車はゆると発電す 菅野 英余

変形の指の関節露の玉 高井 幸子

禍をたぐる節目や敗戦忌 片野 節子

鰯雲明日大漁と漁師笑む 峯尾ユキエ
 蘭の秋転移危ぶむリンパ節 清水美代子
 松下 俊之

虫の声 中村昌男

日暮や記憶の底に火を点す
 風を入れ声かわりけり芒原
 富士影を被り草野は露を置く
 虫集く闇が膨れて見えにけり
 蕎麦の咲く戸隠白き風の中
 大空が交際の場と群れとんぼ
 川風に何時しか慣れて草紅葉
 一灯を消して身に入る虫の声

鈴の音 中田笑子

杖求め準備整ふ秋遍路
 秋蝶や輪袈裟外してコンビニへ
 ドイツより遍路に来しと秋の夜
 蜻蛉や椎の根本にヤッコソウ
 鳥渡る遍路の所作の慣れて来し
 コスモスや札所を巡る鈴の音
 栗飯やお接待所に猫眠る
 山上の紅葉かつ散る札所かな

やれやれと寝ころびさうな老案山子 武居裕美子
 枯節のだし透きとほる無月かな 寶子山京子

◆春野(8・18)

きよ志報

玉虫の羽音みどりに響きをり 秋山 昇
 残照をひきてくちなはゆるゆると 伊藤はる子
 秋扇もう弾まない恋もあり 内田知江子
 しばらくはこの世を離れ風の盆 尾崎 一夫
 石榴熟れたり太陽のしたたりに 瀬戸 悠
 真つ赤なパプリカ残暑に肩張つて 二見 和江
 力抜く術を知らずか土用波 長谷川きよ志

◆みなみ(8・10)

かほる報

盆踊りオリンピックは遠すぎる 加藤れい子
 放たれて水を自在に金魚かな 加藤 健治
 風呂敷にある八月の物語 市川めぐみ
 ジーパンで思わず入る踊りの輪 豊田 幸枝
 竹垣にシューズの乾く鳳仙花 斉藤 静
 穀象という懐かしき名や今は見ず 小瀬村信子
 桃洗う手の平まるくまあるくし 柳川 紀枝
 旅に来て習い踊った安来節 加藤 富江
 炎帝を恨み辛みつ靴をはく 加藤かほる

◆青梅(9・4)

幸子報

基地 山田照子

夾竹桃しんかんたるに軍の基地
 盆踊のポスター基地の金網に
 朝の日が額にあたり露しとど
 狂ひたることは知らず返り花
 収穫の喜び分かつ鴟の声
 火を焚いて二百二十日の朝の畑
 グリーンカーテン大和卯月の手打ち蕎麦
 自問して自答して秋深みけり

花火大会 長谷川きよ志

酒匂川右岸左岸を花火攻め
 真正面に花火真うしろに消防車
 川に眠る魚を起こして揚花花
 硝音は星空へ爆音のウクライナ
 花火群衆評論家が耳元に
 花火師の貌は「一茶」似かも知れぬ
 そろそろと花火大会ぞろぞろと
 縁短し余生は長し遠花火

枝豆のほど良い塩や地酒汲む
 秋茄子の葉影に細き光さす
 戦闘の空へ向いたる曼珠沙華
 青田風総身に老の畑仕事
 秋団扇またも離農のうはさかな

◆おほる(9・11)

生き生きとそよぎに遊ぶ秋簾
 秋初め野原大きく歩きけり
 頬緩む指のせわしく葡萄喰ぶ
 秋暑し自分さがしの詩をよむ
 余生まだ燃えるものあり鶏頭花
 激動の世を見定めて蛇穴に
 秋の夜や戻れぬ日々の甦る
 梨ほおばり甘いすっぱい味くらべ
 限られたいのちの戦虫時雨
 秋の夜亡夫の遺愛の江戸切子
 何処かへ只歩くだけ秋の夕
 秋草の道をたどれば道祖神
 秋の夜や机の上の置き手紙
 朝露やとどく朝刊味噌香る
 秋の夜や音を持たない砂時計

大塚 行人
 湯本とし子
 加藤まり子
 久保寺トミ子
 田中 幸子
 きよ子報
 加藤 春江
 瀬戸とみ子
 高橋みどり
 中根登美子
 中村 昌男
 中津川晴江
 廣田 悦子
 安池 利枝
 原 仁子
 松良 榮美
 吉井源太郎
 二上 光子
 横塚 昌平
 石井千代子
 小野 菊土

秋の夜に永久の調べやカンパネラ
ハーブティー時をくゆらせ秋の夜

◆零(9・19)

放棄田の南瓜葛の葉攻め来たる

生キテヤル婆に砦の柿すだれ

朝ぼらけ案山子大きく眼をさまし

口筆で背中押しつつ野の桔梗

ぱつと張る朝顔の氣に吸い込まる

絵心をくすぐる案山子祖谷の里

マスメディアは猫じゃらし猫は民

◆鷹(9・5)

八月や駅舎に残る弾の痕

爪立ちて結ふ夕顔の遊び蔓

盆の月商店街を猫歩く

薄荷飴楽しんでいる酷暑かな

祈りに始む地域食堂白芙蓉

樹に結ぶ帆布の日除け椅子二脚

施設より日帰りの母生身魂

刈草に畝覆いたる炎暑かな

シユレツダーの反故続々や敗戦日

かなかなや筒に合はせる供花の丈

史郎報

香川 花子
石井きよ子

青木たけを

伊藤 道郎

川合 昌子

佐藤 正子

中村 裕子

野川木一路

岡本 史郎

十五報

池田 令子

西賀 久實

佐宗 欣二

中田 笑子

百川 秀子

山崎美知子

柏木 良花

庄司 下載

瀬戸 りん

高橋久美子

補聴器の拾ふ川音広島忌

シヨベルカーに噛み砕かるる家晩夏

鮎落ちて日に異に高き川音かな

乗り継いで故郷近し青田波

ユーチューブ真似て折り紙文化祭

取り分けし黄檗料理秋裕

爪紅のペディキュアうれしかつこの兎

ホーム掃く駅員カンナ燃えにけり

八月や穹蒼見上げ平和とは

高原に九月の風やミニゴルフ

連山に夕日あまねし威銃

新涼の朝の身支度髪上ぐる

瓢箪や駅舎に在りし小さき窓

ちちははの畑は花野となりけり

軒下に干す薬草や秋の風

自転車が頼りの暮らし豊の秋

涼新た一杯の茶の温みかな

何処までも野山の錦一人旅

先生とむすびを食うて秋祭

流星や湯ぼてりさます庭の椅子

蛇穴に入る湯治場の夕厨

中山智津子
齊藤 桂

芹澤 常子

深澤 一華

大木 敬子

大島美恵子

田下 昌人

中根 和子

加藤 幾代

高橋千代子

守屋 まち

米山 翠

來田 新子

青山 典仁

大沢 年子

小林 環

澁谷 明子

下平 美子

鳥海 壮六

古屋 徳男

村場 十五

◆実のり(9・18)

たか志報

みのり田に風の足音つけてゆく
久方に夜空見上げて月見酒
水神も富士山も見守る稲穂波
明日分かる検査結果や月に手を
月光に眼懐へる鬼瓦

◆草むら(9・20)

重満報

敬老の日おなじ話に花咲かす
ハンモック海底火山の真上とも
花木權妥協許さぬ今日の色

◆無所属

クラスごと来て椎どつさりと先先家
しんしんと泉にみつめかへさるる
野分あと忍野八海水走る
草取りの泥をはらひて黙禱す
蟬穴の深さを測る棒つ切れ
回覧を回しハーフの猫と秋
大山椒魚と稀に出くわす歩行者天国かな
青朝顔野良系核の押しボタン
コルセットはオーダーメイド九月かな
赤とんぼ動体視力衰える

荒井ちゑ子
岩本ひさみ
杉本 久子
木村 幸枝
新井たか志
石井 秀稀
佃 悦夫
佐々木重満
小林永以子
畠 梅乃
北村 文江
一ノ瀬茂代
出澤 洋子
岩楯恵津子
大石 雄介
大石 和子
瀬戸 正洋
岡田 典代

先頭は教習車らし秋暑し

山田 照子

泡立草豪雨身ぐるみ打たれけり

山本 すみ

惰眠なり理由を探す秋どなり

穂坂志げる

ねーあなた楽に逝かせて秋彼岸

神野美代子

子の乗りし木馬は天馬天高し

田畑ヒロ子

台風の迷走政治の迷走

小澤 園子

かなかなはもとに戻らぬ砂時計

須田 聡子

今日出来て明日出来ぬ身や秋更くる

大佐田うづき

夏果ての静けさ青いポリバケツ

杉山あけみ

議事堂に建ちて胸像銀杏黄葉

杉崎 せつ

無所属会員の皆さまへ

「俳句おだわら」への一句を毎月19日必着で

お待ちします。郵便事情を考慮して早めに

投函お願いします。(葉書にて)

宛先…250-0042 小田原市荻窪五四九-1-7

村場十五(広報部)

秋の吟行会

11月7日(木) 国府津海岸周辺

願はくは

深悼・奥名春江先生

長谷川きよ志

「春野」の奥名春江主宰は病氣入院中のところ、令和六年六月十五日脑梗塞のため逝去。享年八二歳。

「春野」七月号に同封された訃報により全会員は恐らく絶句し、深い悲しみに包まれたに違いない。

この訃報を知った村場会長から「奥名主宰は当協会員ではないが、会員の中の多くが指導を受けている。ついで協会展に追悼文を」の申し出に対しこの温かい思いやりとご配慮に感謝し謹んでお受けした。

「春野」は平成五年九月、故黛執主宰により創刊号が発行された。この創刊号に春江主宰は早くもペテラ作家と並んで同人として作品七句を載せている。

拭きあげしばかりの板間小鳥来る 春江

もうこの時から将来のレールは敷かれていたのだ。時を隔てて平成二十七年七月号の執主宰の「謹告」によりバトンタッチされた。その概要は次の通り。

「私儀今月をもって春野主宰を引退します。後継者は奥名春江氏を指名します。春江氏は角川俳句賞（平成四年度）の受賞者であり、作家として豊かな経歴と確かな力量を有し、指導者としても適任で後継主宰と

して相応しい人物と確信致します。」

こうして春江主宰は毎月ウメコで開催の小田原句会に指導者として出席され、丁寧且つその辛口な指導は好評で、類は友を呼び、会員も増加傾向であった。

さて私の先師、藤田湘子を初めやがて迎える辞世に対し詠んだ秀句を挙げてみる。

湯豆腐や死後に褒められようと思ふ 湘子『前夜』

死ぬ時は箸置くやうに草の花 軽舟『呼鈴』

逝くときは祭囃子をききながら 春江『七曜』

「願はくは花の下にて春死なむ

そのきさらぎの望月のころ」 西行

人口に膾炙した古典の名歌、西行の一首を引用すれば、掲出句の上五の頭に「願はくは」を置くことにより句意は鮮明で、更に作者の意図も読みとれる。

尚令和六年八月号の春野誌の遺作にて結びとする。

年寄のこつそり逝けり雲の峰

夏来ると息ととのへし沖の雲

はまゆふや通りすがりに覗く魚籠

夏潮に囲まれて厳しづかなり

まづ水のうまさを言へり夏帽子

月を得て涼しき海となりにけり

潮の香にまだとのはぬ踊の輪

小林 環

向日葵やいつか硝煙消える日に

小野菊土

今、世界では、あちこちで紛争が起き、人々は戦火に苦しんでいる。硝煙とは、火薬の発火によって起こる煙とあるが、ひいては、戦争の形容であろう。向日葵という季語からは、ウクライナの国旗が思い起こされる。青と黄の二色旗の青は、青い空。下の黄は、ひまわり畑や小麦畑の豊かな大地だ。

俳句を通し平和への思いの表現に同感すると同時に、作者と共に、平和を祈らずにはいられない。

佐々木重満

老いし我に父の日という静かな日 青木たけを

父親という在り様が滲みでている佳句です。子供達はもう立派に成人になり、気付いたら我はいつの間にか老いてしまっている。母の日と違い、父の日は誰も気にも掛けない存在感の薄い日です。下五の「静かな日」に父親の哀しみ孤独感が滲み出ています。淡々とした措辞で、上五と下五が季節の「父の日」を引き立てています。私にはない作句です。とても勉強になった一句です。

陌間みどり

砂丘ゆくジープの轍雲の峰

齊藤 桂

景の大きな句を詠みたいと常々思っている。掲句は大きいうえに人間の存在が詠めている。

広大な砂丘を行くジープ、その起伏の先には聳え立つ入道雲。その大空間を行く一台のジープはいかにも小さい。しかし卑小ではない。灼けた砂丘を踏破して雲の峰まで到達しそうな力強さを一すじの轍が物語っているのだ。自然と人間の調和した美しさが映像として浮かび上がってくるこの句に共感を覚えた。

柳澤ミサ子

花火師や影絵のごとく駆けまはる 田中恵一

夏の楽しみに花火があります。大勢の人が打ち上げ花火、手花火を楽しんでいます。とりわけ打ち上げ花火は魔法のごとく夜空に輝きや華やぎ、人々の歓声を呼びます。その花火師の姿は見かけません。裏方に徹しているのです。

目立たずすばやく演じてくれる花火師の姿を影絵のごとくと表現されています。何と的確な表現、さすがです。花火師さん、夏の楽しみをありがとう。

第61回小田原梅まつり俳句大会

第一部 作品募集

兼題 「梅」(春に限る)「余寒」(いずれも傍題可)各一句一組 未発表作品に限る

締切 令和六年十二月二日(月) 必着

整理費 一組に付き千円(何組でも可)

投句先 〒250・0851 小田原市曾比二四三二一

米山 翠 ☎〇四六五―三六―四五九〇

*作品は原稿どおり印刷します。

選者 協会役員及び各地区有力作家(投句者に限る)

賞 県知事賞以下二十位まで 選者特選賞六人

第二部 俳句大会

日時 令和七年二月九日(日)

会場 おだわら市民交流センター(UMECO)

受付 十一時 投句締切・十二時 開会・十二時半

整理費 五百円(呈飲料)

席題 春季雑詠一句と席題当日発表一句 総互選

賞 市長賞以下五十位まで(結社賞含む) 参加賞

(主催) 小田原市観光協会 (主管) 小田原俳句協会

(後援) 各地区俳句協会

*各グループは当日までに結社賞をご用意下さい。

*会場は飲食可能です。マスク着用など感染症防止対策にご協力ください。

新作5句

北村 文江

読経とも蟬の雨降る中尊寺
蓮開く藤原三代吐息めく
黄金にまみれ清衡基衡泰衡暑かろに
万緑や永遠の階段光堂
蟬しぐれ鳴けども鳴けども無位無冠

勝木 澄子

すてられし金髪案山子仰ぐあおぐ
吾亦紅ただあいづちが欲しいだけ
秋立つや出たがり婆は背伸ばす
親と子は離れて暮らし翺雲
この星は沸騰中です稲光

伊藤はる子

ひぐらしや齋場今日は静かなり
寝つかれぬままの車窓や休暇果つ
秋郊のたたまれてゐる車椅子
ぼつねんとベンチしきりに木の実落つ
石榴割れ「笑うセールスマン」のごと

青山 典子

秋暑し通院バスでひと休み
秋草や風吹く朝の清々し
秋祭り朝早くから笛太鼓
秋風を呼びて実りの物多し
江の島の海青々と秋の旅